

実践報告

渡航前オンラインレッスンと短期集中研修（フィリピン）
によるハイブリッド型英語発話力向上プログラム横川 綾子^AThe Hybrid English Language Program for Speaking
Proficiency of the Short-term Intensive Course with
the Preliminary Online LessonsAyako YOKOGAWA^A

Abstract: This paper examines the process of developing the hybrid English language program, consisting of the short-term intensive course in Manila in the Philippines coupled with the preliminary online lessons, which were conducted twice on a trial basis. The program has been organized to help Meiji University students with limited English-speaking skills develop their proficiency intensively. Primary objectives of the program include linguistic preparation and development of intercultural competence for a successful study-abroad experience. First, the paper explains the context behind the creation of the hybrid program and the design of the trial programs implemented in the summer of 2017 and the spring of 2018 respectively. Next, the paper describes the program in practice and examines the impact on the program participants' speaking proficiencies, referring to their TOEIC® Speaking Test scores conducted as pre- and post-tests. Finally, the paper argues how the program has been transformed into a credit-bearing course with the aim of developing both the English language proficiency and the cultural competency as part of the effort to foster global human resources.

Keywords: online lesson, short-term intensive course, speaking proficiency, Philippines, TOEIC® Speaking Test

キーワード：オンラインレッスン、短期集中研修、発話力、フィリピン、TOEIC®スピーキングテスト

1 はじめに

文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援事業」（平成26年度採択）¹⁾が始動して今年で5年目となり、折り返し地点を迎えつつある。平成29年度には、4年目に予定されていた1回目の中間評価²⁾が実施され、平成30年2月28日にその結果が公表された。事業に採択された37大学の取組に対しては、S評価が6件（全体の16%）、A評価が25件（同68%）、B評価が6件（同16%）という内訳であった。筆者が平成29年度から勤務する明治大学も採択校（タイプB「グローバル化牽引型」）の一つであり、今回の評価を真摯に受け止め、大学の国際競争力向上に日々努めている。

本稿は、「スーパーグローバル大学創成支援事業」において、本学が策定した8つの主な取組の一つとして行ってきた「実践的英語力強化プログラム」の枠組みで、夏季と春季の2回、試験的に実施した英語発話力に特化したハイブリッド型英語プログラムの実践報告である。平成30年度からの正規科目化を見据え（同年度から正式科目化済み）、前年度に行ったモニタープログラムの概要と成果を明らかにし、英語発話力向上に特化した短期集中プログラムのあり方と、その運営方法を論じるものである。

2 プログラム開発の背景

2.1 5年間継続した「実践的英語力強化プログラム」
明治大学は、「スーパーグローバル大学創成支援事業」

A: 明治大学国際連携機構

の目標として、毎年の卒業生 8000 人を世界で活躍する「未来開拓力」に優れたグローバル人材として社会に送り出すべく、「世界へ！MEIJI8000」³⁾と題した10年間のプロジェクトを運営している。その施策の一つが、「実践的英語力強化プログラム」(平成30年度から「留学志望者対象英語プログラム」に改訂⁴⁾である。

「実践的英語力強化プログラム」は、文部科学省「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業」の取組(平成24年度採択、タイプB特色型)⁵⁾として、大学在学中に実践的な英語スキルを身に付けたい学習者の裾野を広げる活動を担ってきた。その後、同プログラムは、平成26年度採択「スーパーグローバル大学創成支援事業」の取組として受け継がれ、個々に特色のある学部の英語科目や学部間共通外国語科目を補完する目的で、学生のニーズに合ったプログラムを提供している。限られた予算で最大の効果を上げるべく、プログラムの内容は年度毎に改訂され、平成29年度まで継続された。

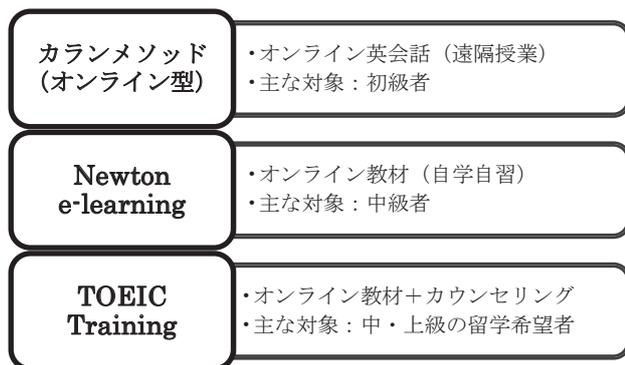


図1 平成29年度実践的英語力強化プログラム

「実践的英語力強化プログラム」は、開講当初からオンライン授業が中心で、学生の意欲と自律性に任せる部分が大きかった。図1に示すように、発話力を養成するプログラムとしては「カリメソッド」⁶⁾がある。しかし、年間100名の定員は、学部生約32000名に対しては僅か0.3%の枠に過ぎず、「話す」・「書く」トレーニングを行うプログラムは、十分に提供できていないのが実情であった。加えて、本節において前述した「世界へ！MEIJI8000」の取組の一つである、2023年に年間4000人の学生を海外へ送り出すという目標を、残り5年のプロジェクト期間で達成するためにも、プログラムの内容に大幅な手直しが求められていた。

2.2 「留学志望者対象英語プログラム」への改訂

前節で述べたように、平成25年度から5年間実施した「実践的英語力強化プログラム」はその役割を終え、平成30年度からは「留学志望者対象英語プログラム」⁷⁾として、支援対象を変えることになった。

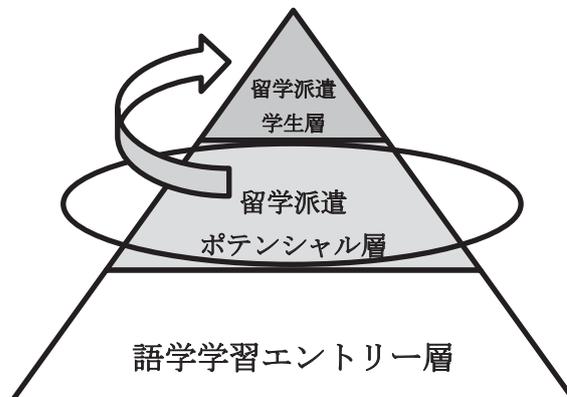


図2 「留学志望者対象英語プログラム」の対象者

「実践的英語力強化プログラム」は、レベルと目的に合った英語学習を、自分のペースで継続したい学生層(以降、「語学学習エントリー層」)の拡大を意図していた。平成30年度以降は、図2中の中段に位置する、将来留学を希望する学生(以降、「留学派遣ポテンシャル層」)を主な支援対象とし、その中から一人でも多くの学生を、実際に海外留学する「留学派遣学生層」に押し上げるためのプログラムを開講している。レベル別・スキル別・試験種別にカリキュラム設計を行い、受講プログラムを学生自ら選択しやすい形に変更した。図3中の平成30年度プログラムのうち、2・3・5は内製化済みであり、1・4は外部委託により実施する。詳しくは、明治大学ホームページ「国際連携・留学」タブ「留学志望者対象英語プログラム」ウェブサイト(http://www.meiji.ac.jp/cip/study_abroad_english/index.html)を参照いただきたい。



図3 平成30年度留学志望者対象英語プログラム

2.3 語学学習エントリー層の発話力養成

「留学志望者対象英語プログラム」は、留学を視野に入れている学生の語学力向上支援に軸を置いているが、人数的にボリュームゾーンの「語学学習エントリー層」から「留学派遣ポテンシャル層」へと学生が継続的に移行しなければ、その上の「留学派遣学生層」も充実しない結果となり、本プログラムは機能しない。

これまで「語学学習エントリー層」向けには、「実践的英語力強化プログラム」の枠内で、「カランメソッド」を提供してきた。しかし、後継の「留学志望者対象英語プログラム」では、予算の関係で、定員を年間100名から60名に絞らざるを得なくなり、発話力を養成するプログラムが不十分な状況が続くことになった。

そこで、明治大学国際教育センター主導で、発話力向上に特化したプログラムを開発することになった。夏季・春季休暇を利用し、比較的短期間で集中的にスピーキング力を養成するプログラムを提供できれば、「留学派遣ポテンシャル層」の拡大のみならず、広義のキャリア教育としても意義があるとの目論見もあった。

開発段階では、「既存プログラムとの差別化」・「実効性の担保」・「学生への訴求力」の三つを念頭に置いた。差別化には、丸ごと外部委託するのではなく大学が教育内容を監修すること、実効性に関しては、プログラム実施前後に客観的数値を用いて教育効果を評価・精査すること、訴求力としては、学生にとって参加しやすい期間・参加費・滞在先の選定に配慮した。また、開発年度にプログラムを試験的に実施し、改良を加えたうえで、翌年度には単位化を含めた正式実施に移行することも計画に盛り込んだ。

プログラム開発と時を同じくして、フィリピンの首都マニラ中心地を拠点とするエンデラン大学⁸⁾と本学の間で、提携交渉が進んでいたことも幸いした。発話力を養成したい学生を海外の語学学校へ送り込むだけでは、学生が自主的に探して参加する語学留学プログラムとの差別化は図れない。そこで、エンデラン大学附属語学学校と連携し、共同でカリキュラム開発を進めることになった。

カリキュラム開発に際しては、既存のプログラムを、学生のレベルやニーズに合わせて改訂・再編成した。懸念材料は、レベル別のクラス編成にはするものの、語学学校の通常の時間割であるマンツーマンレッスン4時間・グループレッスン4時間の計8時間におよぶ

英語のみによる授業に、発話力に不安を抱える「語学学習エントリー層」を中心とした学生が、ついていけない可能性があることだった。そこで、渡航前研修として、オンラインレッスンを組み入れることとした。講師とマンツーマンの英会話レッスンを継続的に受講することにより、英語を聞く・話すことへの心理的なハードルを下げた状態で、渡航先での集中研修に臨む体制を構築した。なお、第3章にて詳述するが、教育効果の比較等のため、夏季と春季とでは、オンラインレッスンの頻度・期間・委託先を変えている。

3 プログラムの概要

本プログラムは、図4に示す通り、渡航前オンラインレッスンとフィリピン・マニラでの短期集中研修を組み合わせたハイブリッド型である。実効性検証には、プログラムの開始前・終了後に、TOEIC[®] Speaking Test (以下、TOEIC Speaking)⁹⁾で発話力を評価し、その客観的数値を効果測定に活用する。

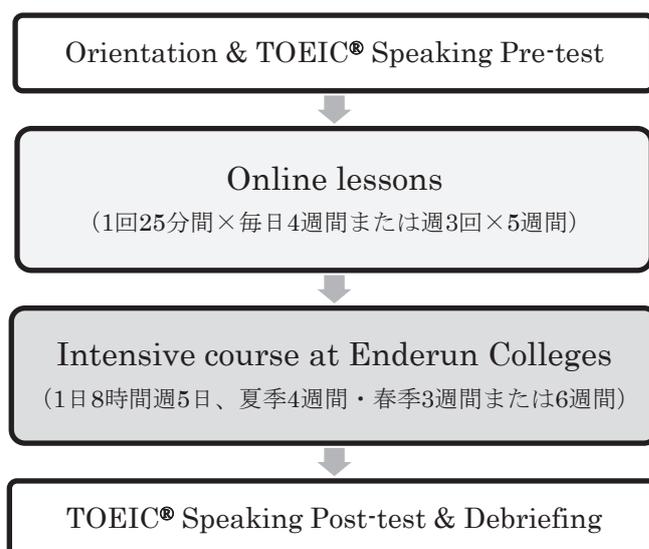


図4 「英語発話力向上プログラム」の流れ

3.1 スカイプを利用したオンラインレッスン

2017年7月～9月実施の第1回モニタープログラムでは、10名の参加者が渡航前研修として、1回25分間のマンツーマンレッスンを毎日4週間にわたり「レアジョブ英会話」¹⁰⁾でオンライン受講した。受講率は毎週確認し、一斉メールで継続受講を促した。

2017年12月～2018年3月実施の第2回モニタープログラムでは、23名の参加者が1回25分間のマン

マンツーマンレッスンを週 3 回 5 週間にわたり、「QQ English (カランメソッド)」でオンライン受講した。第 2 回の参加者は、第 1 回の参加者が述べるオンラインレッスンの効果を説明会等で聞いており、レッスン期間中に受講率を頻繁に確認し、受講を促す働きかけをせずとも、一定の受講率を維持できると想定した。

3.2 エンデラン大学付属語学学校での授業

エンデラン大学付属語学学校では、マンツーマンレッスン 4 時間とグループレッスン 4 時間、計 8 時間の授業が週 5 日間行われる。研修初日に発話力を含めたプレイスメントテストを行い、その結果を基に 4~5 人を単位とするレベル別グループレッスンが実施される。授業内容の定着度診断には、毎週金曜日に Weekly Assessment (実施時間約 75 分)、プログラム全体の習熟度評価には、最終週の金曜日に Summative Assessment (実施時間約 80 分) がそれぞれ行われ、結果は個人の Progress Report に反映される。

マンツーマンレッスンは、図 5 にあるように、パーティションで仕切られたスペースに教師と受講生が並んで座り、60 分に 1 回程度の休憩を挟みながら行われる。語学学校が独自に開発したテキストを使い、発音矯正や語彙力強化 (授業名 Accent Training and Vocabulary Building)、日常的・社会的なトピックに関するディスカッション (授業名 Chatter Box) を中心にレッスンが進む。第 1 回モニター実施では、語学学校の方針を尊重し、特段の事情がない限り同じ講師がマンツーマンレッスンを担当することとした。しかし、学生の反応や現地視察の結果から、第 2 回モニター実施では、ほぼ毎日担当講師が交代する方式に変更した。個々の受講生のレッスン内容は、その日の担当講師が記録し、全講師間で共有される。



図 5 マンツーマンレッスンの様子

グループレッスンでは、1 クラス 4~5 人を講師 1 名が担当し、グループディスカッション・プレゼンテーション・パブリックスピーキング等の練習 (授業名 Oral Communication) を行う。第 1 回モニター実施の結果を鑑み、第 2 回では、エンデラン大学での正規授業の見学 (授業名 College Sit-in) や、キャンパス内で学生や教職員と会話をするフィールドワーク (授業名 Field Work) も取り入れた。

1 日 8 時間の授業時間に、マンツーマンレッスンとグループレッスンをどう組み入れるかにも工夫を凝らした。第 1 回モニター実施では、受講生が 10 名と小規模で、研修地がオフィスビル内の Learning Center であったため、人的資源が限られていた。そのため、A グループは、午前マンツーマンレッスン 4 時間・午後グループレッスン 4 時間、B グループはその逆という方式を取らざるを得なかった。第 2 回モニター実施では、本学からの受講生が第 1 回モニター実施から 2 倍以上に増え、講師や教室の数が多いエンデラン大学のメインキャンパスに研修地を変更したため、より柔軟な時間割が実現した。表 1 に示す例のように、90 分~120 分を単位として、マンツーマンレッスンとグループレッスンを交互に組むことが可能になった。

表 1 時間割の一例

9:00-10:00	Accent Training & Vocabulary Building
10:00-11:00	Room: CA206
11:00-12:00	Field Work
12:00-13:00	Room: TH106
13:00-14:00	LUNCH
14:00-15:00	Chatter Box
15:00-16:00	Room: CA206
16:00-17:00	Oral Communication
17:00-18:00	Room: TH101
18:00-	SELF STUDY

授業時間外には、本学の学生がエンデラン大学の学生と交流し、フィリピン社会への理解を深める機会を設けた。学生交流イベントである Mixer Night をキャンパス内で催し、日本語コーディネーターの引率で、フィリピンの史跡・観光地を巡るフィールドトリップも実施した。

3.3 事前・事後テストとしてのTOEIC Speaking

ハイブリッド型英語発話力向上プログラムの開発に際しては、第2章第3節で述べたように「実効性の担保」を重視したため、モニタープログラムの教育効果を数値的に評価し、プログラム内容の検討や改良に活かす必要があった。

効果測定にはTOEIC Speakingを使用した。外国語学習者の習熟度レベルを示すガイドラインとして活用されているCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)で、取得スコアを参照できること(表2参照)¹⁰⁾、テストの設問が6種類11問と多様で、多角的に学生の発話力を評価できること、「モバイル実施」を利用すれば、学内で簡便に実施できること、実施時間が約20分と受験者の負担が少ないことが、選定の主な理由である。

なお、本プログラムは、主な対象レベルをCEFR A2レベル(TOEIC Speaking 90以上)とし、プログラム受講後にB1レベル(TOEIC Speaking 120以上)に達することを目標に開発された。ただし、正規科目化の際には、英語の習熟度による履修制限は設けない方針であったため、モニタープログラムでも、応募要件として特定の英語レベルは設定せず、応募時点でB1~B2レベルの学生も受け入れた。

実際に応募してきた学生のレベルを見ると、第1回モニタープログラムでは、A2レベルの応募者は予想より少なかったが、第2回モニタープログラムでは、A2レベルの学生が約半数を占めた。応募動機を述べたコメントを読むと、第1回モニター実施では、すでにある程度の発話力を身に付けている学生が参加に興味を示す傾向が見られたが、第2回では、第1回の実績を知り、これから本格的に発話力を養成したいと希望する学生の応募が多かった。

表2 TOEICスコアとCEFR

CEFR レベル		L	R	S	W
Professional User	C2				
	C1	490+	455+	180+	180+
Independent User	B2	400+	385+	160+	150+
	B1	275+	275+	120+	120+
Basic User	A2	110+	115+	90+	70+
	A1	60+	60+	50+	30+

(出典:「TOEIC® Program 各テストスコアとCEFRとの対照表」)

4 第1回モニタープログラムの結果

本章では、第1回モニタープログラム¹²⁾の結果を、日程・参加者・効果測定の結果・参加者によるコメント・振り返りの5項目に分けて報告する。

4.1 日程

- ・募集期間(定員10名):2017年6月14日~22日
- ・オリエンテーションと事前テスト:7月1日
- ・オンラインレッスン:7月5日~8月4日
- ・渡航前オリエンテーション:7月22日
- ・現地研修:8月6日~9月2日
- ・事後テストとデブリーフィング:9月5日

4.2 参加者

募集期間内に応募があった30名から、学部・学年・英語能力・男女比等のバランスを考慮し、10名を選出した。内訳は、1年生4名、2年生4名、3年生1名、4年生1名(男子6名、女子4名)であった。表3に示す通り、参加者10名が応募時に申告した英語能力は、本プログラムが主な対象とするCEFR A2レベルが2割、B1以上が8割を占めた。第3章第3節で述べたように、応募者の中にA2レベルが少なかったこと、学部・学年・男女比のバランスを考慮するとB1以上の学生を選ばざるを得なかったこと等から、この内訳になった。なお、応募時に提出するスコアは2年以内に取得したものに限定したが、必ずしも学生の直近の英語能力を示すものとは限らない点を付記しておく。

表3 英語能力試験スコアとCEFR

受講生	英語能力試験スコア	CEFR
1	TOEFL ITP 533	B1
2	TOEFL ITP 527	B1
3	TOEFL Junior 830	B1
4	TOEIC L&R 910	B2
5	TOEIC L&R 575	B1
6	TOEIC L&R 780	B1
7	TOEIC L&R 465	A2
8	TOEIC L&R 600	B1
9	TOEIC L&R 775	B1
10	TOEIC L&R 520	A2
内訳	A2: 2 B1: 7 B2: 1	

4.3 効果測定の結果

プログラム受講前の2017年7月1日と現地研修から帰国後の9月5日に実施したTOEIC Speakingの結果を表4に示す。スコアが上昇した学生6名、変わらなかった学生2名、下降した学生2名で、最大の伸びは40(事前90→事後130)であった。事前・事後のスコアの伸びの平均値¹⁴⁾を、事前のCEFRレベル別に比較すると、A2レベルの学生5名の平均はプラス16、B1レベルの学生5名の平均はプラス6で、事後にスコアが下降した学生2名は、事前テストではともにB1レベルであった。

表4 TOEIC Speaking スコア

受講生	事前	CEFR	事後	CEFR
1	130	B1	150	B1
2	110	A2	120	B1
3	130	B1	150	B1
4	130	B1	140	B1
5	110	A2	110	A2
6	140	B1	130	B1
7	100	A2	100	A2
8	90	A2	130	B1
9	120	B1	110	A2
10	100	A2	130	B1
平均	116		127	
内訳	A2: 5 B1: 5 B2: 0		A2: 3 B1: 7 B2: 0	

次に、事前・事後のスコア推移と、渡航前オンラインレッスンの受講率との関係を表5に示す。スコア上昇・不変・下降と3つに分けた場合の受講率の平均は、それぞれ約70%であり、大きな違いは見られなかった。ただし、次回以降、同様の取組を行う際は、受講率を100%に近づける方策が必要であると認識した。

表5 スコア推移と渡航前研修受講率

スコア	受講率	スコア	受講率
+40	39%	+10	58%
+30	100%	±0	100%
+20	100%	±0	42%
+20	45%	-10	77%
+10	77%	-10	58%

4.4 参加者によるコメント

- ・TOEIC Speaking は20分なのでレベルチェックに適した長さだと思う。
- ・渡航前に4週間英語を話す「義務感」があったのはよかった。
- ・オンライン英会話で他の学生がどんな教材を使っているのか知りたかった。
- ・マンツーマンレッスンは先生の質がレッスン内容を大きく左右する。
- ・マンツーマンとグループを組み合わせているのがよかった。
- ・グループレッスンは5人だとレベル差が大きくなるため3人程度がいい。
- ・グループレッスンは人前で話す訓練になったが、メンバーが固定だと飽きてしまう。
- ・事前・事後のスピーキングテストでは使う単語が変わったように思う。
- ・事後スピーキングテストではリスニングが伸びたのがわかった。

4.5 振り返り

第1回モニタープログラムでは、事前・事後テストとして実施したTOEIC Speakingのスコア平均が116から127へと11ポイント上昇し、客観的数値で成果を示すことができた。一方、即時に数値には表れない成果の評価方法の開発には、課題が残った。例えば、第1回参加者の中に、帰国後の選考に合格し、協定留学派遣学生として、今年秋から長期留学する2年生(当時1年生)がいる。プログラムの教育効果を論じるには、時間の経過が必要な場合もあると再認識した。

また、現地研修のカリキュラムは本学も開発に関わったが、実際にどのような授業運営がなされているか、学生の反応はどのようなものかを、担当者が現地視察する必要性を強く感じた。授業を実地見学し、細かくフィードバックすることで状況が改善する場面も、少なからずあった。

5 第2回モニタープログラムの結果

本章では、第2回モニタープログラム¹⁵⁾の結果を、前章と同様、日程・参加者・効果測定の結果・参加者によるコメント・振り返りの5項目に分けて報告する。

5.1 プログラム日程

- ・募集期間 (定員 20名) : 2017年12月7日~15日
- ・オリエンテーションと事前テスト : 12月25日
- ・オンラインレッスン : 2018年1月8日~2月10日
- ・渡航前オリエンテーション : 2月1日
- ・現地研修 :
 2月11日~3月3日 (3週間)
 2月11日~3月24日 (6週間)
- ・事後テストとデブリーフィング :
 3月6日 (3週間) および3月27日 (6週間)

5.2 参加者

募集期間内に応募があった56名から、学部・学年・英語能力・男女比等のバランスを考慮し、3週間プログラム13名と6週間プログラム10名の計23名を選考した。内訳は、3週間が1年生7名、2年生5名、4年生1名(男子8名、女子5名)、6週間が1年生5名、2年生3名、3年生2名(男子4名、女子6名)であった。表6・表7に示す通り、全参加者23名のうち、応募時に申告した英語能力試験結果に基づいたCEFR A2レベルは、約5割まで増えた。なお、第4章第2節でも述べたように、提出されたスコアは、応募した学生の直近の英語能力を示すものとは限らない。

表6 英語能力試験スコアとCEFR (3週間)

受講生	英語能力試験スコア	CEFR
11	TOEIC 655	B1
12	TOEIC 600	B1
13	TOEIC 520	A2
14	TOEIC 370	A2
15	TOEIC 480	A2
16	TOEIC 485	A2
17	TOEIC 705	B1
18	TOEIC 640	B1
19	TOEIC 590	B1
20	TOEIC 530	A2
21	TOEIC 455	A2
22	TOEIC 665	B1
23	TOEIC 595	B1
内訳	A2: 6 B1: 7	

表7 英語能力試験スコアとCEFR (6週間)

受講生	英語能力試験スコア	CEFR
24	TOEIC 545	A2
25	TOEIC 625	B1
26	TOEIC 470	A2
27	TOEFL-iBT 60	B1
28	N/A	N/A
29	TOEFL-iBT 53	A2
30	TOEIC 670	B1
31	TOEIC 460	A2
32	TOEIC 445	A2
33	TOEIC 715	B1
内訳	A2: 5 B1: 4 (N/A: 1)	

5.3 効果測定の結果

プログラム受講前の2017年12月25日と現地研修から帰国後の2018年3月6日および27日に実施したTOEIC Speakingの結果を表8・表9に示す。スコアが上昇した学生は3週間10名・6週間6名、変わらなかった学生は3週間1名・6週間3名、下降した学生は3週間2名・6週間1名で、最大の伸びは6週間プログラム参加者による50(事前70→事後120)であった。

表8 TOEIC Speaking スコア (3週間)

受講生	事前	CEFR	事後	CEFR
11	100	A2	110	A2
12	130	B1	100	A2
13	110	A2	120	B1
14	80	A1	110	A2
15	100	A2	100	A2
16	100	A2	110	A2
17	120	B1	110	A2
18	100	A2	110	A2
19	110	A2	130	B1
20	90	A2	120	B1
21	100	A2	110	A2
22	80	A1	110	A2
23	100	A2	140	B1
平均	102		114	
内訳	A1: 2 A2: 9 B1: 2		A1: 0 A2: 9 B1: 4	

表9 TOEIC Speaking スコア (6 週間)

受講生	事前	CEFR	事後	CEFR
24	80	A1	110	A2
25	130	B1	110	A2
26	130	B1	130	B1
27	130	B1	130	B1
28	70	A1	120	B1
29	100	A2	120	B1
30	100	A2	120	B1
31	80	A1	100	A2
32	60	A1	100	A2
33	120	B1	120	B1
平均	100		116	
内訳	A1: 4 A2: 2 B1: 4		A1: 0 A2: 4 B1: 6	

事前・事後のスコアの伸びの平均値を事前の CEFR レベル別に比較すると、A1 レベルの学生 6 名の平均は 3 週間プラス 30、6 週間プラス 35、A2 レベルの学生 11 名の平均は 3 週間プラス 16、6 週間プラス 20、B1 レベルの学生 6 名の平均は 3 週間マイナス 20、6 週間マイナス 5 であり、事後にスコアが下降した学生 3 名は、事前テストでは全員が B1 レベルであった。

表10 スコア推移と渡航前研修受講率 (3 週間)

スコア	受講率	スコア	受講率
+40	93%	+10	93%
+30	100%	+10	87%
+30	100%	+10	18%
+30	93%	±0	73%
+20	100%	-10	100%
+10	100%	-30	100%
+10	93%		

表11 スコア推移と渡航前研修受講率 (6 週間)

スコア	受講率	スコア	受講率
+50	100%	+20	75%
+40	93%	±0	100%
+30	92%	±0	100%
+20	100%	±0	86%
+20	93%	-20	100%

また、表10・表11に示す事前・事後のスコア推移と渡航前オンラインレッスンの受講率には、第1回と同様、関連性は見いだせなかった。なお、全体の平均受講率は、第1回約70%から第2回約91%へと改善したが、第2回では「カランメソッド」のレッスンが体系的に行われたため、受講生の学習意欲が持続したことが主な要因ではないかと推測する⁴。

5.4 参加者によるコメント

- ・1日にマンツーマンで先生と話せる授業が長時間あり、普段できない経験だった。(3週間)
- ・マンツーマン、グループ、フィールドワーク等、様々な授業形態があり、集中力が切れない。(3週間)
- ・安全地域での活動だったので、危険な目にあまりあわずに済んだ。(3週間)
- ・授業後に大学のクラブ活動に参加できれば、なお良かった。(3週間)
- ・グループレッスンでは他の国、他の学校の学生がいたら良かった。(3週間)
- ・Accent Training など英語が苦手でも成長を実感しやすい授業があり、やる気を維持できた。(6週間)
- ・人前で話す機会が多く、そういう場に慣れることができた。(6週間)
- ・1日に8時間も授業がうけられる充実度！友達は授業が4時間ほどであとは観光だったそうだ。(6週間)
- ・Vocabulary Building の教科書のトピックが難しく、語彙の乏しい人には厳しかった。(6週間)
- ・事前の学習として知識をつめこむプログラムをして、現地でそれを使うとよいと思った。(6週間)

5.5 振り返り

第2回モニタープログラムは、第1回から、渡航前研修の内容・現地研修の期間・研修地・滞在先⁵等を変更して行った。初の海外生活に慣れるため2~3週間の短期研修に挑戦したい学生がいる一方、夏季・春季休暇中に出来るだけ長く語学研修に参加したい学生もいるため、研修期間を3週間・6週間から学生が選べるようにし、それぞれの教育効果を測定した。客観的数値としては、事前・事後の TOEIC Speaking で3週間は12ポイント上昇、6週間は16ポイント上昇という成果を得た。これは、モニター実施に求められていた「実効性の担保」に一定の役割を果たすデータとなる。

学生アンケートの結果は、第1回よりも好意的な意見が多く見受けられた。

6 平成30年度からの正規科目化

第4章・第5章で述べたモニター実施の結果、正規科目として開講するに値する実効性と教育内容の質が確認できたため、本プログラムは平成30年度以降、単位付与を伴う「海外語学研修講座(英語)」になった。正規科目化にあたり、必要となった対応と今後の課題を以下に述べる。

6.1 到達目標

単位化に伴い、到達目標を新たに設定した。これまで実施したモニタープログラムでも、英語発話力の向上のみならず、渡航国の文化・社会に対する理解を深め、異文化対応力を身に付けさせる狙いはあったが、それを以下のようにシラバスに明文化した。

【到達目標】

中長期留学とその準備に必要な英語発信力を短期集中で強化しつつ、フィリピンの文化や社会に対する理解を深め、異文化に対する対応力を高める。本プログラムの主な対象レベルはCEFR A2 レベル(すでにB1 レベルに達している学生も参加可能)で、プログラム受講後にB1 レベルに達することを目標とする。

6.2 成績評価方法

成績評価は、プログラム受講前・受講後に提出する日本語のレポートと、エンデラン大学付属語学学校による評価を総合して行うこととした。レポートを事前・事後に課すのは、受講前に各自の学習目標を明確にさせ、受講後に学習成果を自己評価させる目的がある。また、エンデラン大学付属語学学校には、個人に発行されるProgress Reportの形式を踏襲し、プログラム修了後、客観的数値をもって成績評価を行い、結果を本学と共有するよう依頼している。

【成績評価方法】

- ・受講を希望する理由をテーマにしたレポート
※事前講義日に提出 10%
- ・エンデラン大学付属語学学校による評価 80%
- ・習得した英語技能をテーマにしたレポート
※事後講義日に提出 10%

6.3 事前・事後学習

単位化に伴い、講座の到達目標に「渡航国の文化・社会への理解」を明示したため、事前・事後学習もそれに対応した。事前学習は、渡航約3週間前に合同で行い、フィリピンの文化・政治・社会体制などの基本知識を確認した後、渡航までに行うべきリサーチや準備を話し合う。事後学習は、3週間・6週間プログラムとも帰国後3日目に実施し、各自が体験したフィリピン社会についての考察や、比較文化的な視点からの日本社会の分析などを行う予定にしている。

なお、モニタープログラムに組み込まれていた渡航前オンラインレッスンは、正規科目化に伴い、受講料は学生負担となった。

6.4 効果測定

モニター実施では、プログラムの実効性を確認する必要があったため、大学が受験料を全額負担して、TOEIC Speakingを事前・事後の2回実施した。しかし、今回の正規科目化に伴い、効果測定は受益者である受講生の自己負担で行うことになった。したがって、国際教育センター主催の講座説明会では、発話力を客観的数値で評価する意義を説明し、事前・事後で発話力を測定するテストの自主受験を強く推奨している。

6.5 今後の課題

正規科目化以降は、本プログラムの質保証をCEFR B1 レベルに維持する方策を、新たに考案する必要がある。本学が開講する他の語学研修講座と同様、研修費や英語能力試験受験料は、受講生の自己負担となる。費用の自己負担化により、TOEIC Speakingの事前・事後受験をプログラム参加者に義務付けることができないため、モニター実施で行った客観的数値を伴う効果測定は、現行の仕組みでは出来ないことになる。

代替策として、エンデラン大学付属語学学校による個人別評価を精査する、同校のカリキュラムを継続的に検討し必要な改善を求める、参加者が研修前後に受験した英語能力試験のスコアを任意提出させる等の方法を想定している。加えて、プログラムに参加した学生が英語圏の長期留学に挑戦する、フィリピン滞在中を通じて身に付けた異文化対応能力が就職活動等において強みとなるといった、数値に表れにくい教育効果にも着目していきたい。

7 まとめ

本稿は、平成 30 年度からの正規科目化を見据えて試験的に実施したハイブリッド型英語発話力向上プログラムの実践報告である。モニター実施を 2 回経て、予定通り、平成 30 年度から正式科目化を完了した。その第 1 期生となる学生 28 名 (3 週間 20 名、6 週間 8 名) は、2018 年 8 月 5 日にフィリピンへ渡航する。

3 パターンのモニタープログラムを実施・検証した結果、1 か月前後の短期間であっても、1 日 8 時間のよく配慮されたプログラムに集中的に取り組めば、CEFR A2 レベルの大学生が B1 レベルの英語発話力を得るのは不可能ではないことが確認できた。初回の 4 週間プログラムでは、TOEIC Speaking のスコアが A2 以下の参加者の割合が、受講前の 50% から受講後は 30% に減った。参加者を変え、半年後に実施した 3 週間プログラムでは A2 以下が 85% から 69% に、6 週間プログラムでは 60% から 40% に減じた。言い換えると、プログラムの到達目標である B1 以上の割合が、4 週間で 50% から 70% に、3 週間で 15% から 31% に、6 週間で 40% から 60% に増加したことになる。

ただし、正規科目化の影響で、渡航前オンラインレッスンの受講料や、事前・事後の TOEIC Speaking の受験料が全額自己負担となり、学生に対する強制力が弱まったことは、今後のプログラム運営と質保証における課題であると認識している。その一方、正規科目履修生として講座を受講する学生の学習意欲は、大学からの授業料助成を受けて参加したモニター学生のそれより高く、プログラムが意図する教育効果をより高次に体現してくれる可能性もあると期待している。

アルク教育総合研究所(2015)によると、B1 レベルの英語使用者は、「職場の定期的な会議で、新しい商品開発など、議題の概要を理解し、事実確認をしたり、自分の意見を述べたりして、ディスカッションに参加することができる」¹⁴⁾ とされる。大学教育の出口保証として、B1 レベルの英語発話力を備えた学生を可能な限り多く輩出することが、約 32000 人の学部生を抱える本学の社会的責任の一つであると自負している。

本プログラムは、シラバスの到達目標にある中長期留学を促進する役割も担う。講座修了後の学生の動向を追いながら、プログラムの質を維持・向上しつつ、グローバル人材育成教育に努めたい。

注

- [1] 事前・事後のスコアの伸びの平均値は、該当者の「(事後スコア) - (事前スコア)」を足して人数で割った値であり、事後にスコアが下降した学生がいる場合、伸びの平均値も下降する。
- [2] 第 1 回モニター実施の渡航前オンラインレッスンは、参加者のレベル差が大きかったこともあり、学生の希望に応じたレッスン内容で、「レアジョブ英会話」を受講させた。しかし、特に A2 レベルの学生にとっては、あらかじめ決まっているプログラムを進める方が、意欲と達成感を感じやすいことがわかった。よって、第 2 回モニター実施では、レッスン頻度は毎日から週 3 回に減るものの、レッスン内容が体系的に編成されている「QQ English (カランメソッド)」へ変更した。
- [3] 滞在先は、学生の安全確保を最優先として選定した。現地コーディネーターの勧めもあり、第 1 回モニター実施では、研修地から徒歩圏内のビジネスホテルに 2 人 1 部屋で滞在させた。第 2 回モニター実施では、現地学生との交流の機会増大に配慮し、キャンパスから徒歩圏内の大学の寮を滞在先とした。治安面で問題ないことが確認できたため、正規科目化後も、滞在先は大学の寮を指定している。この大学寮は、徒歩圏内に大規模ショッピングモールがあり、生活至便な立地となっている。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省スーパーグローバル大学創成支援事業：
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1360288.htm (2018 年 7 月 9 日参照)
- 2) 「スーパーグローバル大学創成支援事業」(平成 26 年度採択) の中間評価について：
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1401770.htm (2018 年 7 月 9 日参照)
- 3) スーパーグローバル大学創成支援「世界へ！ MEIJI8000」
<https://www.meiji.ac.jp/koho/sgu/sgu-8.html>
(2018 年 7 月 9 日参照)
- 4) 2017 年度「実践的英語力強化プログラム」受講者募集について
<https://www.meiji.ac.jp/cip/info/2017/6t5h7p00000nmpol.html> (2018 年 7 月 9 日参照)
- 5) 経済社会の発展を牽引 (けんいん) するグローバル人材育成支援
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1361067.htm (2018 年 7 月 9 日参照)
- 6) QQ English オンライン英会話「カランメソッド」
https://www.qqeng.com/callan_method/
(2018 年 7 月 9 日参照)
- 7) 明治大学「留学志望者対象英語プログラム」：
http://www.meiji.ac.jp/cip/study_abroad_english/index.html (2018 年 7 月 9 日参照)
- 8) Enderun Colleges：
[<https://www.enderuncolleges.com/>, retrieved July 9,

- 2018]
- 9) TOEIC® Speaking Test :
<http://www.iibc-global.org/toEIC/test/speaking.html>
 (2018年7月9日参照)
- 10) レアジョブ英会話 :
<https://www.rarejob.com/> (2018年7月9日参照)
- 11) TOEIC® Program 各テストスコアとCEFRとの対照表
http://www.iibc-global.org/toEIC/official_data/toEIC_cefr.html
 (2018年7月9日参照)
- 12) 明治大学 2017 年度 英語発話力向上モニタープログラム (フィリピン) の募集について
<https://www.meiji.ac.jp/cip/from/information/2017/6t5h7p00000oi2i5.html> (2018年7月9日参照)
- 13) 2017 年度春期英語発話力向上モニタープログラム (フィリピン) の募集について
<https://www.meiji.ac.jp/cip/from/information/2017/6t5h7p00000pwwah.html> (2018年7月9日参照)
- 14) アルク教育総合研究所.(2015).グローバル教育を考える (Ⅱ・2「社会人の英語使用実態調査」の結果 p. 185) .アルク.

受付日 2018年7月11日、受理日 2018年9月15日